

前編／アンとケリー、乱暴者を懲らしめる

アンの父親は共同墓地の管理人をしていた。今は、新たに埋葬されることのない墓地だったが、彼はたまたま訪れる墓参客のためにそこを清潔に保っていた。墓参客がないときは入口の大きな鉄の門には鍵がかけられていた。

アンと、その友人のケリーにとって、その墓地は理想的な練習場だった。彼女たちは、新しく学校に赴任した女性体育教師のカートライトさんから護身術を習いはじめていた。共同墓地は二方を二メートルの高さの石の壁に囲まれていた。一方はアンの家と庭、そして鉄門で塞がれていて、もう一方は低い壁で仕切られていた。その壁の向こうは崖になっていて、下の道路まで一〇メートルはあった。

その日も、アンはケリーと、きれいに刈りそろえられた芝の上で訓練をはじめた。アンとケリーはともに十三歳。均整のとれたボディラインは年齢にしてはよく発達し、美しい曲線を描いていた。彼女たちはネイビーブルーのパンツにスポーツシャツ、白いソックスに運動靴といういでたちだった。

彼女たちは、誰かが壁を登って侵入してくるなどと、考えてもいなかった。壁を越えてボール

が転がってきたことに、アンもケリーも気づかなかった。練習を始めたとき、壁の向こうの通りで男の子たちが遊んでいる声は聞こえていたのだが。

不意に口笛の音が響いた。壁の上に、ノックスがいた。

「ボールを投げてくれよ」

ノックスが、墓地のなかに転がってきたサッカーボールを指さした。

「それとも」

彼はいやらしい目つきで彼女たちを見た。

「そのボールで遊びたいか？ 男のボールだよ」

彼は意味ありげに笑った。壁の向こうに、彼の仲間たちがいて、くすくす笑っているのが聞こえていた。

少女たちは怯み、顔を見合わせた。ノックスは十六歳で、女の子たちに卑猥な言葉を投げつけてからかうのが好きな乱暴者だった。アンは肩をすくめ、ボールを拾い、壁の向こうに投げ返した。ノックスが壁の向こうに消えた。少女たちは再び練習を始めた。

ところが、すぐにまたボールが投げ入れられた。ノックスが再び壁の上に現れた。今度は彼の幼なじみでやはり十六歳のヒートリーもいた。彼らは卑猥な笑みを浮かべていた。

「ボールくれよ」

ノックスはヒートリーを肘でつついて笑った。

「あいつら、よほど男のボールが好きみたいだぜ」

ヒートリーはげたげた笑った。

アンはボールを拾い、壁の向こうに投げ返した。

「これが最後だからね」

アンは脚を広げて両手を腰にあてがい、ノックスを睨んだ。

「あんたたちのつまらない駄洒落なんか聞きたくないの。さっさと行っちゃいな！」

「おおっ」

ノックスは唸った。

「俺のボールじゃあものたりねえらしいな」

彼は、壁の向こうの仲間に合図した。再びボールが墓地に投げ込まれた。

「もし俺のボールでよけりゃ、かわいがってやってくれよ」

壁の向こうのノックスの子分たちが笑った。今度はケリーがボールを拾い上げた。彼女は二度、手でボールを空中にはねあげ、壁の上の二人の少年に穏やかに言った。

「最後だって言ったでしょ、ノックス。ボールが欲しいのなら、降りて来なさいよ」

「降りて来い、だと？」

ノックスがわめいた。

「ボールを投げてよこせ。じゃねえと、ほんとにそっちに降りてくぞ。そうになったら、ただじゃ

すまねえよ」

「そうね、ただじゃすまないかもね」

ケリーは挑むように言った。

「あんたみたいな口汚い餓鬼には、お仕置きが必要かも」

「よし」

ノックスは吠えた。彼は、少女たちの反抗にキレていた。

「おい、みんな来い。生意気なメスどもに、男つてものを教えてやろうぜ」

ノックスとヒートリーが墓地に降り立った。続いて、三人の仲間が入ってきた。

ノックスの妹で十二歳になるバーバラも、この後、どんな展開になるのか、好奇心で眼を輝かせて、壁を乗り越えて入ってきた。

「ふうん、大勢連れてきたね」

ケリーは冷やかに笑った。

「女の子二人を相手に、よっぽど自信がないのね」

ノックスはカッとなった。彼は、十三歳の女の子が、自信ありげに立ちはだかっているのが信じられなかった。彼は、頭が大きく、肩は筋肉で盛り上がり、ケリーよりもちろん大きく、体重は倍はあった。彼は決心した。この女を打ちのめし、皆の眼の前で辱めを与えてやる。子分たちの信用を回復するために、さっさと片づけてしまおう、と。

ノックスはつかつかとケリーに歩み寄った。手を延ばして彼女の肩をつかもうとした瞬間、ケリーはノックスの顔をめがけてボールを投げた。ノックスは反射的にボールを両手で受けとった。ケリーが前に踏み出た。無防備に晒された睾丸めがけて、鋭いキックをぶちこんだのだ。

ノックスはぽかんと口をあけた。その口から苦痛に満ちた叫びが発せられた。つづいてケリーは彼の筋肉質の腕をつかみ、太い脚のつけ根にある睾丸に膝蹴りを浴びせた。ノックスは息が詰まった。

ノックスの巨体がよろめいた。両手で睾丸を押さえていた。口から、泣き声が漏れていた。ケリーは彼の膝小僧を爪先で蹴った。ノックスが倒れた。彼が、地面に這いつくばる直前に、ケリーは足の甲でその顔を蹴り上げた。ノックスは吹っ飛ばされ、仰向けに地面に転がった。少女は猫のように素早く動いた。彼のビヤ樽のような腹の上にまたがり、顔面にパンチを浴びせた。彼女はカートライト先生の教えを実行したのだ。

「中途半端に攻撃を止めてはいけません。相手がほんとうにくたばるまで攻撃を続けるのです。戦うのは一度だけで十分。徹底的に叩きのめしておけば、相手は二度とあなたに近づこうとはしないでしょう」

ケリーはノックスを徹底的に叩きのめした。彼女の拳が何度もノックスの顔面で炸裂した。

「おい！」

ヒートリーが叫んだ。彼は、彼の仲間を打ち倒した少女にショックを受けて立ちすくんでいたのだが、ここにきて止めなければ、と決心した。

「てめえ、金玉を蹴るなんて汚ねえぞ」

ヒートリーはノックスに駆け寄り、彼の腹の上にまたがった少女を突き飛ばした。ケリーは地面に転がった。だが、すぐに立ち直った。彼女はさつと立ち上がり、新たな敵と向かい合った。

ヒートリーは、彼女と戦う気はなかった。だが、途中で喧嘩を阻まれたケリーの怒りは凄まじかった。彼女は、少年の喉にめがけて、恐ろしく強いキックを浴びせた。

ヒートリーはよろけ、喉笛を手で押さえた。その後ろから、アンがとびついた。彼女はヒートリーをはがい締めにした。ヒートリーの両足が、バランスをとるために大きく開かれた。ケリーがその股間を蹴り上げ、その腹部にパンチを見舞った。ヒートリーは地面にくずおれた。二人の少女は、地面を転げ回る彼に殴る蹴るの乱暴を始めた。

気絶していたノックスは、こみあげてくる股間の痛みを意識を取り戻した。彼は、女の子にやられてしまったことに、激しく憤った。彼は痛みをこらえて立ち上がり、よろよろと少女たちに近づいた。そして、哀れなヒートリーに次のパンチを浴びせようとするアンの腕をつかみ、引き剥がそうとした。

野良猫の尻尾をつかんだようなものだった。アンはくると彼のほうに向き直り、自由なほう

の手でノックスの顔をひつかいた。ノックスが後ずさりすると、今度はずしりと重い膝蹴りを鞞丸に打ち込んだ。ノックスはショックと激痛に呻きながら、鞞丸を両手で押さえて飛び上がった。アンは彼の髪の毛をつかみ、今度は顔面に膝蹴りをくれた。彼の鼻が折れた。彼は、凄まじい激痛に、悲鳴をあげた。アンは、倒れそうになった彼の体を膝で支え、筋肉で盛り上がった彼の胸の下のみぞおちに、手刀をたたき込んだ。すんなりした美少女の残酷な攻撃に、彼は肺からひゅつと息を吐き出し、地面の上に転がった。

アンは情け容赦なく、鞞丸を両手で押さえて四つん這いになり、呻き、痙攣する哀れなノックスに、何度も拳骨を見舞った。アンは、彼の髪の毛をつかんで、ぐいと頭を引っ張りおこし、もう一つの手を彼の尻に回した。細い、女らしい指がノックスの鞞丸をつかんだ。彼女はぎゅつとそれを握りしめた。ノックスは、火で焼かれるような激痛に、金切り声をあげた。

バーバラは興奮して一部始終を見つめていた。彼女は最初、自分と年の違わない少女たちが、彼女の大きな兄を打ちのめしている光景を信じられない思いでいた。やがて、彼女は、兄やヒートリーを叩きのめしている少女たちを応援している自分に気づいた。彼女の兄は優しさのかけらもない男で、幼い頃から彼女を苛めていた。だから、バーバラは痛めつけられている兄になんの同情も抱かなかった。むしろいい気分だった。彼女もまた、カートライト先生の授業を受けていた。男の子を叩きのめしてやったら気持ちいいだろうな、と思っていた。彼女の兄に、断末魔の

悲鳴をあげさせているアンの姿に、バーバラはしびれるような快感を覚えた。彼女は決心した。他の男の子たちが少女たちに立ち向かってきたら、自分も少女たちに加勢して戦おう、と。

だが、他の少年たちは、親分を助けようとはしなかった。彼らは、年齢にしては発達した体をもつ半裸の少女たちが、年上の強力な少年たちをう打ちのめしている光景を、惚けたように眺めているだけだった。

ヒートリーは、四つん這いで地面を這いまわり、片手で容赦なくパンチやキックを浴びせてくるケリーから身を守ろうとしていた。ノックスがアンに鞆丸を握られて悲鳴をあげたとき、ヒートリーにチャンスが訪れた。ケリーは、アンが危険な目にあっているのかと勘違いし、そちらのほうに体を向けた。

ヒートリーは立ち上がり、痛みによるけながら壁に向かって走りだした。気づいたケリーは後を追いかけた。追いかけてくる少女に気づいたヒートリーは、パニックに陥り、必死に逃げた。

壁の向こうに、墓地を見下ろせるただ一軒の家があった。その二階で、レッグ・コリアアは驚いたように、少女たちの戦いぶりを眺めていた。彼は着替えるためにベッドルームに入り、トランクスを脱いだところで、窓からその光景を目撃したのだ。彼は、屈強そうな少年たちが、細いしなやかな体つきの少女たちに痛めつけられている光景を呆然と眺めていた。彼のペニスは勃起していた。

気がつくと、彼の若い妻のキャロルが傍らに立っていた。

「ずーい」

キャロルは墓地の光景を見ながら叫んだ。

「あなたも興奮してるみたいね。私が入ってきたのに気づかなかったくらいだから。それ、がんばれ、つかまえる」

しなやかな脚を躍動させ、ポニーテールを靡かせながら、ケリーはついに追いついた。彼女は、恐怖におののく少年に体当たりした。少年は地面に転がった。ケリーは敏捷に素早く立ち上がり、少年の両足の足首をつかんで持ち上げた。彼女は、その重い脚を広げるためにしばし奮闘した。

「まさか、あれを……」

レッグは、少女を凝視しながら呟いた。

「やるでしょうね」

彼の妻が囁いた。彼女は期待に息をはずませていた。

ケリーは、少年の脚を大きく広げ、その鞆丸を思い切り蹴りつけた。

ヒートリーの体が大きくバウンドし、彼は断末魔の苦痛にのたうちまわった。少女は容赦なく、

美しい脚を再び彼の睾丸に打ちこんだ。

「やったあ！」

キャロルの手は、夫の勃起したペニスをつかんでいた。彼女の眼はららんと輝き、その少女が大柄な少年に致命傷を与えた光景に興奮していた。

ケリーは、ヒートリーの脚を離れた。少年は地面に顔を押しつけ、苦痛と絶望に呻いている。ケリーは、少年の後頭部に足を乗せ、その顔を芝にめり込ませ、ガッツポーズをした。彼は、最後にもう一度ヒートリーを踏みつけ、アンのいる方向に歩きだした。

アンは、膝まづくノックスの正面にすくと立ち、片手で彼の髪の毛を、片手で彼の顎をつかみ、傷めつけられ涙に濡れた彼の顔を静かに凝視していた。

「かわいそうに」

彼女は宥めるように囁いた。

「やられちゃったのね、ノックス。女の子にやられちゃったんだよね。でもね、ボールで遊んでくれて言ったのはあんたのほうよ。どう、ボールで遊んでもらって楽しかった？ さあてと、立てるかなあ？」

アンはノックスの髪の毛をつかんで立たせた。ノックスは震える脚でようやく立ち上がった。

「はい、よくできました。」

アンは褒めた。アンに髪の毛をつかまれ、吊るされたような恰好で立っていた。彼の逞しい両腕は意図の切れた操り人形のように垂れ下がっていた。アンは彼を支えるために彼の胸に手をあてた。

「わあすごい」

彼女は叫んだ。

「すごい筋肉。こんないい体してるくせに、年下の女の子にやられちゃうなんて、恥ずかしいと思わないの？」

ノックスの心は凍りついていた。こんなことがあっていいのか。彼は、仲間の目の前で十三歳の女の子にいたぶられ、恐怖に体が麻痺していた。彼の心は若い美少女戦士によって壊されていた。もはや抵抗する気力も残ってはいなかった。これ以上の責め苦を与えられたら、気が狂ってしまうかもしれない。

アンは、きれいに伸びた脚で、彼のたくましい腿を開けさせた。彼女は手をのばし彼の股間に触れて仰天した。彼のペニスは勃起していた！

アンは興奮した。彼女は恐れおののく捕虜の背後に回り、片手で彼の髪の毛をつかみ、片手で彼の両手を背中に回して押さえつけた。

「みんな、見てえ！」

アンは叫び、ぐいと彼の体を起こして、他の少年たちに見せつけた。ノックスのペニスはテントを張ったように、ズボンの布を押し出していた。

「ノックスってさあ、女の子にいじめられるのが好きみたいよお」

「すげえ！」

レグがつぶやいた。

「あの女の子、完璧にあの餓鬼を打ちのめしたぞ。もう、あの餓鬼、あの娘と戦う気にはならんだろうな」

「そうね」

妻が同意した。

「すでに戦意喪失ね。あの女の子、彼をどうにでも出来そうね」

彼女は夫の背中にまわり、片手で彼の睾丸をつかみ、片手で腹をさすった。夫のペニスはまだ勃起していた。

「あなた、女の子が男の子をいたぶっているのを見るのが好きみたいね。女の子は、その気になれば、男の子をいたぶるくらい簡単なの。私たちは、一度やり方さえ覚えれば、男の子よりすごい戦士になれるものなの。女は男よりもはるかに残酷だから。わかった？」

ケリーは、芝の上で悶絶しているヒートリーをほったらかしにしてノックスに歩み寄った。

「あら」

ケリーは叫び、勃起したペニスをつついた。

「ねえ、私、男の子のものが勃起してるのを見たことないの。よかったら見せてくださらない、ノックス？ 女の子に男の子のボールで遊んでほしいんでしょ？」

彼女は、少年のズボンを脱がせた。アン、ケリー、そしてバーバラの三人の少女は、真っ赤な顔をした少年の股間に勃起するペニスを見つめた。アンは興奮して叫んだ。

「ノックス、オナニーしてみせなさい！」

彼女は、強く彼の髪の毛を引っ張った。

「はやく、やりなさいよ！」

ケリーは拳を振り上げ、ノックスを脅した。

「オナニーして。じゃないと、また顔にパンチを食わせるよ。さあ」

ノックスはオナニーを始めた。あつという間だった。何度かしごいただけで、彼の体が痙攣し、どろどろした液体を芝の上に零した。

バーバラは眼を見開いて、その光景を見ていた。彼女も、勃起したペニスを見たことがなかった。彼女は、その大きさに驚いた。もし、あんな大きな男の子を叩きのめし、みんながか見ている前でオナニーを強制させることができたなら、どんなに素晴らしいだろう、と思った。

他の少年たちは仰天していた。幼なじみが叩きのめされた、というだけではなく、少女戦士たちの残酷さに圧倒されてしまったのだ。

「ノックス、もういいよ」

ケリーが言った。

「もう二度とここに姿を見せないでね。わかった？」

こわされた少年は頷いた。

「アン、仕上げは任せたよ」

ケリーがアンを促した。

「喜んで」

アンは会釈を返し、力をこめてノックスのぶらさがった睾丸を膝蹴りした。その激痛はもうノックスの忍耐の限度を越えていた。ノックスは断末魔の悲鳴をあげ、気を失った。

ケリーは、彼女の足元にくたばった相手に軽蔑するような視線をくれ、その肋骨を蹴って、アンと並んで満足そうに歩きたした。その方向にはヒートリーが地面にうつ伏せに倒れていた。二人の美少女戦士は、打ちのめされた敵に屈み込んだ。

アンは少年の片足をつかんでねじり、仰向けにした。彼はまだ、傷めつけられた睾丸をつかんでいた。彼は、少女が彼のすぐそばに立っているのを見て、おののいた。涙が溢れ出た。彼女は美しい脚を広げて立っていた。年齢にしては豊かな乳房が、スポーツシャツの下で誇らしげに隆

起していた。

彼は、この可愛らしい敵に、完全に打ちのめされたことを信じられないでいた。彼は家に帰ってきた。もう十分だ。澄ました顔で立っているこの少女のために、断末魔の苦痛を味わったのだから。彼は涙を零しながら、もうやめてくれ、と呻いた。

アンは興奮していた。タフで筋肉質な十六歳の年上の少年が、彼女に、もういじめないでくれ、と懇願しているのだ。彼女は満足した。彼には、あともうほんの小さな罰を与えるだけでいいだろう。

「ズボンとパンツを脱ぎな」

彼女は命令した。ヒートリーは躊躇った。アンは叫んだ。

「早く！」

彼は呆然とした。彼は、傷に痛みをこらえるのに懸命で、少女たちがノックスにした仕打ちを見ていなかった。十三歳の少女が、服を脱げと命じているのだ。一瞬、ヒートリーは抵抗する気力を振り絞ろうとした。しかし、彼をうちのめした少女がじっと見ているのを見て、気力が萎えた。彼はパンツを脱いだ。

「よろしい」

アンは喜んだ。ヒートリーのペニス黒い茂みのなかで勃起していた。今度はこいつが辱めを受ける番だ。



「みんなが見てる前でオナニーしないで。さあ、いい子だから、ほら、何してるの？」  
アンは優しく言った。

「ほらほら、上手にオナニーするのよ。いい子ねえ」  
屈辱に震えながら、しかし今まで感じたことのない興奮をどこかで感じながら、少年は命令に従い、喜んでみている少女たちの前で射精した。

アンは、少年の胸に足を乗せた。

「はい、よくできました。じゃあ、もうひとつ、いい子をしてくれるかな。いうことをきいてくれるかな？」

ヒートリーはもはや抵抗する気は失せていた。

「はい」

彼は涙を零しながら頷いた。

「いい子ねえ」

アンは言った。

「それでは、もう少し、あんよを広げてくれるかな。そうそう、そのくらい」

アンは少年にそう言い、V字型に広げられた少年の股に踏み込んだ。

「もう、女の子に悪さしちや駄目よ、ヒートリー」

少年は断末魔の悲鳴をあげた。アンはすました顔で、剥き出しになった彼の睾丸を思い切り残

酷に踏みつけたのだ。彼の体が跳ね上がり、彼はのたうちまわり、アメーバーのようになった睾丸を押さえて泣きわめいた。

アンは少年の壊された体を踏みつけ、勝利のガッツポーズをした。

レッグは大きいため息をついた。少女たちが、下半身を裸にされた哀れな敗者たちを前に勝利を祝っている光景を見ながら、彼の妻が何こすりかしただけで射精してしまったのであった。

「ほうら、私が言ったとおりでしょう。女の子ってのはとても残酷なの」

妻の手が夫の睾丸を覆った。

「私だってその気になれば、あなたを同じ目に遇わせることが出来るのよ。誰がボスなのか、よく覚えておくことね」

キャロルはくすくす笑いながら部屋を出た。

「さっさと連れていきな」

ケリーが、少年たちに命令した。

「ノックスとヒートリーが、十三歳の女の子に叩きのめされて強制オナニーさせられたことを、みんなに喋ってまわるんだ。忘れるんじゃないよ。いいね」

バーバラが少女たちに近寄った。彼女の眼は、同じ志向のヒロインを見つけた喜びに溢れてい

た。彼女は熱にうかされたように言った。

「すごい……。すごかった。よかったら、私にも教えてくれないかな。どうやったら男の子をやっつけられるか」

「喜んで」

アンは言った。

「あなたの兄さんも、妹の目の前で、女の子に叩きのめされ、弄ばれて嬉しくなかったんだろね。そうね、じゃあ、いくつかコツを教えてあげよう。見たでしょ？ 彼らのペニスのサイズがどんなだったか……」

### 後編／ノックスとヒートリーの逆襲、そして返り討ち

それから数週間。ノックスは落ち込んでいた。ノックスとヒートリーが、ケリーとアンに叩きのめされてからというもの、彼はどうやって彼女たちに仕返しをするか考えつづけた。彼らは、幼なじみの前で恥をかかされた。彼らが、少女たちに弄ばれている間、幼なじみたちは彼をあざ笑っていた。妹のバーバラさえ、言うことをきかなくなった。それまで彼女にやらせていた雑用を、自分でしなければならなくなった。

最初、ノックスは再び立ち直れないくらい打ちのめされていた。彼が少女たちから受けた打撃は、彼の精神を完全に破壊されていた。彼は屈辱に満ちた敗北を噛みしめさせられた。なぜあんな女の子たちに、三歳も年下で、彼の半分くらいのおおきな女の子に負けてしまったのだらう。睾丸を蹴られたのが敗因だ、と彼は考えた。こちらが準備する前に、彼女が卑怯にも睾丸蹴りという奇襲戦法をとったためだ、と自分自身を納得させた。そうに違いない。彼女は卑怯だった。ようし、こちらも負けずに卑怯な手を使ってやる！ 彼は、ヒートリーに相談をもちかけた。

彼らにとっては絶好のチャンスだった。

その日、アンは自宅の庭の芝にタオルを敷いて、セパレーツの水着姿で寝そべり、日光浴を楽しんでいた。ノックスとヒートリーが共同墓地の壁を越えたとき、彼女はいい気分であつらうつらしていた。

まさに不意打ちだった。アンが気がついたときには、ノックスは太い褐色の腕で彼女の首を締め上げ、もう一つの手で彼女の両腕を後ろ手にねじ上げていた。彼は、彼女のしなやかな体を後ろに折り曲げた。アンは痛みと怒りに叫ぼうとしたが、彼女の喉を締め上げるノックスの腕が、そうさせなかった。

「よお、ねえちゃん」

ノックスが言った。

「家には誰もいねえよ。ちゃんと確認したからな。あんたと、あのメス犬にしてもらったお返し

をさせてもらうぜ」

彼は、彼女の腕をさらに強くねじ上げた。痛みがアンの体を貫いた。

思春期に入ってほどなく、アンは魅力的な少女に成長した。体操と護身術の教室に通ったおかげで、筋肉はしなやかに発達した。彼女の肌は健康的に輝いていて、白いビキニの水着に覆われたヒップとバストは、十三歳とは思えないくらい豊かに発達していた。

「やったぜ！」

ヒートリーはにたにたしながら叫んだ。

「俺たちがさせられたみたいなのに、オナニーさせようか。それとも、俺たちがレイプしちゃおうか」  
がっしりした少年は拳を振り上げた。

アンはすでに不意打ちのショックから立ち直っていた。ねじ上げられた腕が痛み、いまの体型が不利であることは承知していたが、彼女は冷静にいまの状況を分析した。無駄な抵抗はせず、体をだらりとして、ただ視線だけを注意深く周囲に這わせていた。

ヒートリーはぼきぼきと指を鳴らしながら、友人が完璧に少女のしなやかな体を押さえこんだのを見つめた。

「いいぞ、ノックス。もうやつつけたも同然だ！」

彼らはそう言い、足を踏み出した。

ノックスも、少女が無力になったことを感じ、ヒートリーの言葉にちよつと戸惑った。彼は、

ほんの少し、彼女をねじあげた手の力を抜いた。彼女を地面に叩きつけるつもりだった。少女は、喜んだ。チャンス到来！

彼女は右脚を後ろにあげてノックスの腹に押しつけ、左脚を軸足にして思い切り前方に蹴り出した。彼女の右足が恐ろしい勢いでヒートリーの睾丸に炸裂した。ヒートリーが悲鳴をあげるよりも早く、彼女は体をよじってノックスの腕から離れ、彼のほうに体の向きを変え、同時にヒートリーの顔面を肘で打った。

ノックスは、ヒートリーが股間を手で押さえ、だらしなく地面に這いつくばるのを、口をぽかんとあけて眺めていた。彼の鼻は少女の肘に破壊され、血が噴き出していた。ほんの一分前、彼女は彼らの手のなかにあった。今や、彼女は、がっしりした敵の男のうち一人を倒し、もう一人と戦うべく態勢を整えていた。

アンは護身術の教室で、いちばんいい護身とは叫びながら逃げることだと教わった。しかし、彼女は力を取り戻した。彼女は、この乱暴者たちを彼女の庭から追い払おうとは思わなかった。彼女はヒートリーを無力化した。そして今や、彼女は大柄なノックスに立ち向かおうとしていた。もし彼が戦うことを望むなら、彼女は受けて立つつもりだった。そして、今度こそは、本当に叩きのめしてやるつもりだった。彼がいかに大きかろうとも！

彼女は、腰を落として戦う姿勢をとった。

ノックスはアンを見つめた。本来ならば、こんなちっぽけな女は二度ばかり殴れば十分のはず

だ。彼女の太股は遅しく発達していたが、腕は枝のように細かった。背骨をへし折ることだって出来るだろう。だが、なぜか彼は躊躇った。彼女は自信たっぷりに見えた。謎めいた微笑みが魅力的な唇に浮かんでいた。彼女は、女らしく怯えていなければならぬはずだった。それなのに何故だ？ 大柄な年上の少年は、恐怖を覚えた。

数週間前、彼女は、今しがたヒートリーにしたように彼の鞆丸を蹴り上げ、みな目の前で彼を叩きのめした。彼は、彼女の可愛い、穏やかな顔を殴りたかったが、また鞆丸を蹴られるのは御免だった。彼は、左手で股間を防御し、右手で少女に殴りかかった。

アンはひらりと身を引いて、少年のパンチをかわした。パンチが空を切った。左手で股間を防御していたために、体のバランスが崩れた。彼女は左脚の膝を軽く曲げ、右脚を鎌のようにしてノックスの脚を薙ぎ払った。ノックスがうつ伏せに地面に倒れるやいなや、敏捷な少女は彼にまたがり、髪の毛をつかみ、彼の太い首筋に拳骨の嵐を見舞った。ノックスは、少女のしなやかな体に押さえつけられ、脚をばたばたさせるばかりだった。

不意にアンはノックスの体から離れた。立ち直ったヒートリーが彼女の頭めがけて蹴りを入れてきた。間一髪、彼女は蹴りをかわした。尻餅をつきながら、キックに失敗してよろめくヒートリーのみぞおちに両足を叩きこんだ。ヒートリーはふっ飛ばされて、庭の小屋の壁に叩きつけられた。木の壁に頭をもろにぶつけ、彼はふらふらになって倒れた。

アンはヒートリーに飛び掛かり、そのみぞおちを、ピストン運動のように拳で繰り返し繰り返し殴りつけた。彼女は片手で呆然とする少年の頭髪をつかみ、片手に全身の力をこめて、少年の顎にアッパーカットを食わせた。容赦のない拳の雨の降るなか、ヒートリーのがっしりした体は、ゆっくりと小屋の壁からずり落ちた。もはや、少女戦士の怒りの攻撃から彼を守るものは何もなかった。

アンはヒートリーの髪の毛を離した。敏捷な少女は、片足で立ち、見事な回し蹴りを彼の喉笛に見舞った。この残忍な一撃で、少年は美少女の足元に倒れた。さらに彼女は、無表情に彼の肋骨を蹴り、腎臓を踏みつけた。

「しばらく静かにしてな」

アンは屈伏した男に囁いた。  
痙攣するヒートリーを地面に放っておいて、アンは再びノックスのほうに向かった。彼は地面に膝をつき、ぼんやりとなった頭を振って意識を取り戻そうとしていた。アンが傍らに立ったのを見て、彼は腕をあげて攻撃を防ごうとした。まるでバレエ・ダンサーのように優雅な動作で、少女は少年の腕をかわし、思い切りその顎を膝で蹴り上げた。

ノックスの巨体が芝の上になだの字になって仰向けに倒れた。アンはノックスの横で膝をつき、片手で首根っこを押さえ、片手でみぞおちを繰り返し殴った。パンチがみぞおちに食い込む度に、少年は苦痛の悲鳴をあげ、脚を痙攣させた。パンチは深く深く、恐怖に包まれた少年の体に食い込んだ。

ノックスは混乱していた。少女に懇願し、攻撃をやめるよう頼みたかった。だが、別のノックスがそれを拒否した。彼は最後の力を振り絞り、褐色の腕を振り回し、アンを横薙ぎに殴った。アンは仰向けに倒れた。

だが、アンは素早く立ち上がった。そのとき、彼女は何かにつまづいてよろめいた。それは、痛めつけられた体を起こそうともがくヒートリーだった。

「つかまえる！」

ノックスが、さんざん殴られたみぞおちを両手で押さえ、よろよろと立ち上がりながら怒鳴った。だが、ヒートリーには命令を実行する力は残っていないかった。弱々しく彼女の細いくるぶしをつかんだが、彼女は脚を一振りして彼の手を払った。

アンは、冷静に状況を判断した。ヒートリーは四つん這いになってのたうちまわっている。息づかいも苦しげで、起き上がるだけの力も残っていないようだ。ノックスは立ってはいいるが、動きは鈍い。しかし、二人のうち、まだ危険が残っているとしたら彼だろう。まず彼を倒す！彼女は決心した。

アンは優雅な所作でヒートリーの肋骨を蹴った。ヒートリーはごみくずが風に吹き飛ばされたように、地面に叩きつけられた。その体を飛び越え、少女はもう一人の敵に襲いかかった。ノックスには、少女のスピードや敏捷さについてゆく力はなかった。彼女の小さな拳が、すでに傷めつけられた彼のみぞおちに炸裂した。ノックスのみぞおちは真っ赤になった。彼は最後の力を振

り絞り、ほっそりした、しなやかなボディラインの美少女戦士の美しい顔にパンチを浴びせようとしたが、彼女の素早いパンチが徐々に力を奪っていった。振り上げた腕はだらしなく空を切った。彼の顔や腹を何度もパンチが襲った。やがて少年は次第に庭の隅に追い詰められていった。

一〇メートルほどの高さのフェンスに背中をおしつけられた。

ノックスは、消耗し、絶望していた。彼はもはや腕を振り上げる力もなく、少女の小さな拳に打たれるがまだだった。彼は、手で頭を覆い、少女の攻撃から身を守るしかかなかった。かすかな望みは、彼が少女に倒される前に、ヒートリーがなんとか立ち上がって助けに来てくれることだった。

アンのほうも、ヒートリーが戻ってきて背後から襲いかかってくる前に、ノックスを倒してしまうつもりだった。彼のほうには注意を払っているつもりだった。だが、それは些細なことだった。彼女は、彼女の拳がノックスの体を痛めつける音や、ノックスが苦痛のあまりあげる声や、彼女に向ける恐怖に満ちた眼を楽しんでいた。この傲慢な乱暴者を叩きのめし、屈伏させ、二度と立ち直れないようにしてやる、と彼女は決意していた。

だが、やはりヒートリーも要注意だった。いったんケリをつけるために、アンはノックスのむなぐらをつかんで引き起こし、だらりと垂れ下がった鞆丸に激しい膝蹴りを食わせた。

ノックスは断末魔の叫び声をあげ、鞆丸を両手で押さえ、アンの足元に倒れた。アンは軽蔑の眼差しをしながら力をこめてノックスの肋骨を蹴り、ヒートリーのほうに向き直った。ヒートリー

―はよろめきながら、庭のフェンスに向かっていた。逃げる気なのだ！

アンはぞくぞくした。筋骨隆々のたくましい男が、彼女を恐れ、逃げようとしているのだから。彼を捕まえるのは簡単だった。彼女が軽く脚をひっかけると、ヒートリーはだらしなくつまづき、地面に這いつくばった。彼女は素早く彼に馬乗りになり、片方の手で少年の太い首を締め上げ、片手で彼の腕をねじあげた。

果然となり、息を切らせながら、ヒートリーはもはや手向かいしなかった。

「降参する？ ヒートリー。それとも腕をへし折られたい？」

彼女は彼の耳元で囁き、さらに強く腕をねじ上げた。ヒートリーは悲鳴をあげた。

「どうするの？ 返事は！」

彼女はさらに高く腕をねじ上げた。耐えがたい激痛が少年の肩を襲った。恐怖に金切り声をあげた。息をすることも出来なかった。ヒートリーは激しく地面を叩きながら、

「降参します！ 降参します！」

と叫んだ。

アンは彼の腕を離し、素早く立ち上がった。

「四つん這いになりな！」

彼女は命令した。ヒートリーは恐ろしい美少女からやっとな解放され、呻きながら言われた通りに四つん這いになった。

「もう少し、脚を広げて」

アンが、恐れおののく敗者の回りを歩きながら言った。

「そうそう、いい子ね」

彼女はそう言った瞬間、後ろから無防備な彼の睾丸を思い切り蹴りあげた。

ヒートリーは全身をよじった。恐ろしい悲鳴が迸った。両手両足が大きく広げられ、地面に叩きつけられた。少女の最後の一蹴りで、彼は意識を失った。

ノックスは四つん這いになり、眼に涙を溜めて唇を震わせながら、少女がこちらに歩いてくるのを見た。腰を振り、勝ったのは彼女であるという事実を誇示するように、誇らしげにこちらに歩いてきた。その美しい顔に、微笑みが浮かんでいるのを見て、彼は恐怖に全身がおののくのを感じた。

ノックスは彼女に、帰らせてくれ、これ以上いたぶらないでくれ、と懇願したかった。もはや、彼女の恐ろしい拳の嵐から身を守るために逃げだす気力も残っていないかった。だがもう一人の自分が、まだ戦いつづける、と囁いていた。彼は年上で、体も大きく、あんな小娘よりも強いはずだ。彼は勝たなくてはならない。女など負けてたまるか。

だが、やはり負けたのだ。彼女はヒートリーを完全に叩きのめした。そして、彼女は今度は彼に向かって歩いてくる。彼の眼は、美しいプロポーズを見せつける彼女の四肢に注がれた。自信に満ちた微笑みが彼女の口許や、傷一つない美しい顔に浮かんでいた。彼の勇気は完全に萎

えた。

ノックスは地面に座り、両手をあげて慈悲を乞う仕種をした。

アンは意気揚々としていた。ノックスも屈伏した！ 彼を完璧に叩きのめしたのだ！ 二人とも叩きのめしたのだ！ 一人の女の子が年上の大きな少年を二人も叩きのめしたのだ！ 彼女の胸は誇りで満たされた。後は、彼らが恥しらずにも再び彼女の庭に現れ、彼女を襲おうとした事の報いを受けさせるだけだ。

彼女は哀れな敗者を見下ろして命令した。

「立ちな」

少年は立ち上がり、弱々しく少女を見上げ、それからうなだれた。

「服を全部脱げ！」

一瞬、彼は拒否するような仕種を見せた。少女は、まだ歯向かう気だな、と思い、片手をのばして彼の耳をつかみ、少年の涙に満ちた眼をにらみつけた。自分よりも強いことを嫌というほど思いしらされた少女の眼に見据えられ、少年の男らしさは溶け去った。

「早く！」

アンは吠えた。ノックスは屈辱に奮えながら、しかし、男としての誇りは少女への恐怖でどこかへ飛び去り、彼は着ているものを脱ぎ、勝ち誇った少女の前に裸を晒した。

「よし。手を後ろに回せ」

アンは命令した。ヘラクレスのように筋肉質の少年は、素直に従った。アンはノックスが脱いだトレーナーを引き裂き、それで両手を縛った。アンは彼を壁のところまで連れていった。ヒートリーも同じように全裸にし、後ろ手に縛って同じ場所に連れてきた。

今や、二人の少年は裸にされ、次に少女が何をするか恐怖に奮えながら立っていた。彼女は、男らしく発達した肉体をもつ二人の少年が、だらりとペニスをぶら下げて、おのいている様を楽しんだ。

彼女はヒートリーの前に立ち、細い女らしい指で彼のみぞおちを撫でた。

「お腹の具合はどう、ヒートリー？」

指で、傷めつけられた腹を小突かれ、ヒートリーはかすかに呻いた。アンは彼の喉をつかんで壁に押しつけ、何度も何度もパンチをたたき込んだ。白いビキニの美少女に、残ったすべての力を奪われ、ヒートリーはがくりと膝をついた。アンは、喉をつかんでいた手で髪の毛をつかみ、頭をひきあげた。懇願するような目に涙がたまっていた。

ふと、彼女はヒートリーのペニスが勃起しているのに気づいた。彼女は歓声をあげ、驚いたように眼を見開いた。

「まあー！」

彼女は指で彼のペニスを弾き、叫んだ。

「ひよつとしてキミ、女の子に殴られるのが好きなのかな？ いいこと思いついた」

彼女は彼の陰囊をつかみ、引っ張った。

「ここでいい子にしてじつとしてなさい」

彼女は、今度はノックスの前にたった。

「さて、ノックス君」

アンは彼の腹を軽く撫でながら言った。

「キミのお腹もかるうく叩いてあげる。ヒートリー君みたいに、女の子に叩かれるのが好きだといいんだけどね、どう？」

「やめてくれ、お願いだ」

ノックスは懇願した。しかし、もう遅かった。少女の拳が彼のみぞおちで何度も炸裂した。やがて彼女は歓声をあげた。ノックスのペニスが勃起したのだ。

アンはノックスの睾丸を持ち、ヒートリーの真向かいに立たせた。彼女は男たちの真ん中に立ち、それぞれの手で彼らのペニスを握った。絹のようなめらかな指で何度かしごとと、彼らは射精した。

アンは、彼らの睾丸を引っ張って、膝まづかせた。彼女は、腰に手をあて、脚をひろげて彼らの前に立った。

「ひどい目にあわせてごめんね」

彼女は魅力的に微笑んだ。

「女の子にこんな目にあわせられるなんて、よっぽど嫌だったでしょうね。これで最後だから、いい子にして言うこときいてね。もう少し、脚を広げてくれるかな？」

恐怖のあまり、催眠術にかかったようになった少年たちは、泣きながら彼女の命令に従った。

アンは、その睾丸を次々と蹴り潰した。

「さあ、出て行って！」

アンは芝の上で悶絶する二人の少年に命令した。彼女は頭髪をつかんで、彼らを壁まで引きずり、蹴っ飛ばした。それから彼らの戒めを解き、裸のまま外に放り出し、彼らの服を壁ごしに投げ出した。

「いつでも戻ってらっしゃい」

彼女は嘲るように言った。

「また、いじめられなくなったなら、いつでもどうぞ」

彼女は勝ち誇って笑い、二人の大柄な少年が、よたよたと逃げだす様を見送った。

傷だらけになったノックスがようやく家に辿りつくのと、妹のバーバラが、何があったのか、と訊ねた。彼の溜まり溜まった憤りが妹に向かって噴出した。ノックスは彼女の顔に殴りかかった。

アンから受けた傷も癒えていない彼が、誰かと喧嘩をするのにいいタイミングではなかった。しかも相手は妹のバーバラなのだ。その事を、彼はすぐに思い知ることになる……。